6大学をつなぐオンラインワークショップ実践「私と地域とそのあいだ」

～コロナ禍における地域とメディアとの関わりを考えるために～

林　田　真心子[i]・鳥　海　希世子[ii]

1　研究の概要

1－1　背景

本稿はコロナ禍の2021年にオンライン形式で実践したワークショップ「私と地域とそのあいだ」の内容を報告するものである。大学生・大学院生を対象に，私たちと地域，そのあいだを結ぶメディアとの関わりについて考えることを目的としたもので，東京・愛知・大阪・広島・福岡の5都府県6大学の学生をつないで実施した。まず，実践の背景から記したい。

本研究は，地域コミュニティと協働する実践的メディア研究の進化を目指し，実証的な調査研究と創造的な実践研究を連環させた方法論について提案することを目的とした「地域コミュニティに基づくメディア・デザイン実践の方法論に関する研究」の一環としておこなったものである[1]。昭和女子大学の鳥海希世子を主担当に，関東から九州の6大学の研究者6名で実施する共同プロジェクトである。プロジェクトを開始した2020年，新型コロナウィルスが世界で広がった。複数が集まる対面形式のイベント自粛や「新しい生活様式」「新しい日常」がさけばれる中で，私たちの日常におけるコミュニ

[i] 福岡女学院大学人文学部メディア・コミュニケーション学科
[ii] 昭和女子大学環境デザイン学部環境デザイン学科

ケーションの様式やメディアとの関わりは大きく変容しようとしていた。

本プロジェクトではまず，コロナ禍における地域と私たちとメディアの関係性を捉えるためにアンケート調査を行なった。社会調査を専門とするジョン・ジュヨンを中心に，2021年５月，宮城・東京・愛知・大阪・広島・福岡の６都府県を対象に実施した[2]。結果の詳細は別稿に譲るが，地域の情報を得るためにどのようなメディアを利用しているのか，またコロナ禍に関する情報はどの様に入手し，どのようなメディアを信頼しているのかなどについて，日常的なコミュニケーション基盤との関わりという観点からたずねた。この調査の設計は，「コミュニケーション･インフラストラクチャー理論（以下，CIT）」（Kim & Ball-Rokeach, 2006）に基づいている。

CIT は，アメリカ・ロサンゼルスのエスニックコミュニティに対して積み重ねられた量的･質的な社会調査の成果によって構築された理論で，コミュニティとコミュニケーションの関わりをエコロジカルな視点から捉えるアプローチである。コミュニティにおけるストーリーテリングのリソースの存在に注目し，「住民」「コミュニティ組織」「地域のメディア」（図１）による三者の関係性をみることによって，人びとの地域に対する帰属意識や社会活動

図１　コミュニケーション・インフラストラクチャー
（Kim & Ball-Rokeach 2006: 176）

への参加度，共同的なアクションに対する感覚のあり方などを探ることができる。（Kim & Ball-Rokeach 2006: 176-178）

１－２　ワークショップの概要

次に，アンケート調査対象地域の中から５都府県６大学の学生12名に集まってもらい，地域と私たちの関係性について考えるオンラインワークショップを実施した。目的は，第一にアンケート調査による実証的検証とあわせてワークショップ実践という方法をとることで，地域コミュニティとメディアをめぐる問題に複合的にアプローチすることである。本プロジェクトでは，さまざまな地域，世代を対象に実践研究を行なっていく予定で，今回は，大学生・大学院生を対象としたオンライン実践を試みたものである。コロナ禍における地域との関わりに照準し，学生が地域をどのように捉えているのか，また，コロナ禍で地域との関わりにどのような変化があったのか，あるいはなかったのかについて考えた。

第二に，コロナ禍で人と人とが関わる機会が持ちづらくなる中で，地域を超えて集うワークショップをデザインし実践することで，感じていることを共有する場をつくりたいという願いがあった。ワークショップのデザインについては鳥海・ジョン（2022）を参照されたい。本稿では，ワークショップの概要と，参加者の間でどのようなやりとりがなされたのか，その内容を中心に報告する[3]。

ワークショップは2021年11月６日にオンライン会議ツール「Zoom」を用いて行なった。参加者は東京・愛知・大阪・広島・福岡にある大学の大学生，大学院生12名である。当日の主な流れを表１に記し，順に実践内容をみていく。なお，以下はワークショップにおける発話とチャットによる意見交換，および事後アンケートの内容をまとめ，分析したものである[4]。

表１　ワークショップのタイムテーブル

時間	内容	概要と目的
15分間	導入	・ワークショップの概要説明 ・主催者の自己紹介
30分間	セッション１： Sharing My “Local”	・参加者の自己紹介とアイスブレーキング それぞれ「地域」との関わりをあらわす写真を用意し，それをめぐるストーリーを共有しながら自己紹介を行なった。
約１時間	セッション２： My “Local” before & with COVID-19	・３つのグループにわかれてディスカッション アンケート調査の結果を共有した上で，「地域」との関わりについて話し合った。
10分	まとめ	・チャットでの意見交換 ・事後アンケートの記入

２　セッション１　自己紹介：Sharing My “Local”

２－１　概要

セッション１「自己紹介：Sharing My “Local”（私にとっての「地域」を共有する）」は，ワークショップの概要説明及び，主催者の自己紹介の後に実施した。予め参加者に「あなたの地域との関わりをあらわす写真」を用意するようお願いし、その写真の説明を通して自己紹介をしてもらう活動である。写真のお願いとワークショップの広報にあたっては，図２のようなチラシを作成した[5]。地域はあくまで「あなたにとっての地域」とし，居住地なのか故郷なのか，どの程度の広さを指すかなどは具体的に限定しなかった。

図２　ワークショップのチラシ

写真は全て事前に主催者側でとりまとめ，1 枚ずつスライドショーとして画面共有できるよう準備をした。なお，冒頭におこなった主催者の自己紹介についても，それぞれの自分と地域との関わりをあらわす写真を示しながらカジュアルな雰囲気でおこなった。セッション 1 の様子を事前に参加者へ示すことで安心感を持ってもらい，その後の自然な流れをつくるためである。

12名の参加者が持ち寄った写真の枚数は，2 枚準備した 3 名分を含み，全部で15枚となった[6]。その一覧を表 2 に示す。表 2 は，ワークショップ当日に自己紹介をしてもらった順序にそって上から下に並べている。写真の内容・撮影地・説明は，どれも筆者が当日の参加者の発話内容からまとめた。写真に写された内容は，近所のお店や公園，景色，動物，料理，家族や友人など多様だった。また，撮影地に海外が含まれている点には，参加者に留学生を含む，海外にルーツを持つ学生が複数いたことが反映されている。

予め写真を見せながら自己紹介をお願いすることを伝えていたこともあり，セッション 1 の参加者の発話の多くは滑らかだった。おおよそ話す内容を考えてきていただけでなく，なかには地元の地域情報を別のスライドにまとめてきて紹介する人もいた。「福岡から東京まで！ 6 つの大学をつなぐ」オンラインワークショップであることを，新たな人に出会う機会の乏しいコロナ禍において楽しみにしてくれていたことが伝わってきた。各参加者からの話の後，筆者らが 1，2 個の質問やつっこみをしながら，セッション 1 は全体として和気あいあいと進行した。

ここでは，参加者の自己紹介や話してもらった「地域との関わり」にまつわるストーリーから，特に印象的だった二点について紹介する。

表２　セッション１の写真とその説明の概要（（２）は２枚持参したことを示す）

グループ	氏名	写真の内容	撮影地	説明
1	A	近所の たこ焼き屋	大阪	自宅の一角で営業しているたこ焼き屋。母校である小学校のソフトボールチームに遊びに行った帰り道につい寄ってしまい、小学生にねだられ買ってあげる。
	B	中国・元宵節の お祭り	中国	中国から日本での授業を受けている留学生。中国の大学卒業後、1年ぶりにルームメイトと会った場所。コロナのため、卒業の際には記念写真さえ撮らなかった。
	C	隣駅の橋の上 から見た夕焼け	神奈川	大学進学とともに神奈川県で一人暮らし。少し歩きたい時に、最寄り駅の1つ手前で降り、橋を渡って帰る時の夕焼けの空。上京してから自然に目がいくように。
	D	高校の卒業式 （友人と自分）	アメリカ	アトランタで高校を卒業した。濃い時間を過ごした仲の良い友達。両親は今も住んでいるがコロナのため渡米できず、この夏久しぶりに帰ることができた。
2	E	両親が米を 育てる田んぼ	福岡	東京の大学に通うがオンライン授業のため、一時的に地元の福岡に戻っている。両親が趣味でお米を育てており、よく送ってくれる。いつも楽しみにしている。
	F	近所の公園に いる地域猫	福岡	毎朝、ウォーキングのため広めの公園へ行く。そこには多くの地域猫がいて、撫でたりする。お世話をするボランティアの方々とも自然と話すことが増えた。
	G	近所にある 桜の有名な公園	神奈川	幼い頃から関わってきた公園。中学校と高校はこの公園に隣接していた。公園から高校の敷地に入れたようで、校庭の金木犀をとっている地域の人がよくいた。
	H	飼っている 犬と自分（２）	愛知	飼っているゴールデンレトリバーのおかげで、もともと強かった地域のつながりがさらに強くなった。踏み込んだ、プライベートな話もするようになっている。
3	I	太宰府天満宮と 梅ヶ枝餅（２）	福岡	太宰府天満宮はもちろん、「鬼滅の刃」で注目された竈門神社など、もともと地元への誇りを感じていたが最近それを再確認した。
	J	ボランティア 活動の仲間	大阪	コロナ禍で新しい人に出会う機会がなくなってしまったと思い、始めたボランティア活動。自然豊かな場所に行ったり、新しい「通う空間」ができた。
	K	自分でつくった 天津飯	広島	留学生。出身は中国の天津だが、中国に天津飯はない。中華料理というより日本の味が強い。初めて天津飯と聞いた時、ドラゴンボールの登場人物かと思った。
	L	家族の集合写真 （２）	東京	アメリカ出身。2年前のお正月、今はカリフォルニアに戻ってしまった家族も東京におり、祖父母も含めて過ごすことができた。コロナ禍の直前で、宝物の写真。

２－２　「地域」と家族

まずひとつは，家族，なかでも親の居住する場所やその存在を通して地域をとらえる視点である。発話のなかで具体的に自身の親にふれた参加者は３名いた。

１人目は，福岡県出身で東京の大学に通うＥさんである。Ｅさんの写真は，一面に稲穂のゆれる田んぼだった（図３）。この田んぼは，福岡にいる両親

図 3　E さんの写真

が育てているもので，趣味で農業を始めたというエピソードが話された。一人暮らしをする E さんのもとへも頻繁に送ってくれ，いつも楽しみにしているそうだ。E さんの場合には，地域には今住んでいる東京ではなく，地元の福岡が選ばれたことになる。福岡から東京に送られるこのお米は，E さんにとって両親とのつながりを感じさせるものであると同時に，それらが育った田んぼが E さんにとっての地域との関わりをあらわす場所であった。

２人目と３人目は，アメリカ出身であるという共通点がある。東京に住む D さんの写真は，ジョージア州アトランタでの高校卒業の日に撮った，仲間との集合写真だった。４年前の写真ということになる。両親は現在もアトランタに住んでおり，コロナ禍のためなかなか会うことができなかったが，この夏にようやく帰ることができたと話した。筆者からの質問に，「いま住んでいる場所の生活も楽しいですが，地域との関わりと聞いて最初に思い浮かんだのがアメリカのことだった」と答えた。実家があり，「すごく濃い時間を過ごし，仲のよい友達のいる」場所が，D さんにとっての地域との関わりを感じる場所であった。

東京に住む L さんは，アメリカと日本に家族がいる。東京にいるのは，中学の時に１年半日本へ留学した際に一緒に暮らしたこともある祖父母である。L さんは，新型コロナウィルスが流行する直前の2020年のお正月に，東京で

家族が集合したときの写真を選んだ。もう１枚は，東京の祖母とのツーショットである。Ｌさんの場合には，地域として両親の住むカリフォルニアではなく，東京が選ばれている。地域と聞いて，居住地を指すととらえたことが伺える。その上で，しかし「自分と地域の関わりはない。生まれも育ちもアメリカだったので」と話した。そこで，東京という場所との関わりは，家族（特に祖父母）を通してあると考え，これらの写真が選ばれた。

親という言葉は出なかったもの，離れた地元を思いながら撮られた写真は他にもあった。Ｃさんの夕焼け空の写真である。「静岡の田舎出身」と自己紹介したＣさんは，自然豊かな環境で育ったという。しかし，東京の大学に通うため神奈川県で一人暮らしをする生活には，あまり自然と触れ合うことがない。敢えて最寄り駅よりも１駅手前で降り，橋の上を歩くときに広がる建物に遮られない大きな空は，故郷に思いを馳せる景色でもあった。

このように，家族，なかでも親の住む場所やその存在を通して地域をとらえる視点は，セッション１のなかで複数の参加者に見られた。共通点として，全員が東京の大学に通っていること，また，現在親元を離れて暮らしていることは挙げておくべき点だろう。都道府県や国を超えて家族や親しい友人たちと過ごした故郷を思う気持ちは，コロナ禍によってより一層高まっているのではないだろうか。学生にとっての地域との関わりを考えるうえで，故郷との物理的・心理的距離感，なかでも親という存在がいかに地域との関係性を媒介しているかを見る点が重要であることが分かった。

２－３　コロナ禍に始めた行動と「地域」

印象的だったもうひとつの点は，新型コロナウィルスの流行による行動の変容が直接的なきっかけとなり，新たな地域との関わりが生み出されていた例である。12名の参加者のうち８名が，自己紹介において何らかのかたちでコロナ禍の状況について具体的にふれていた。なかでも２名の写真は，コロナ禍に始めた自らの行動によって地域との関わりが広がったことを示すものだった。

福岡に住むＦさんは，コロナ禍になってから近くの比較的広さのある公園で，毎朝ウォーキングをしているという。その公園には，腕章をつけたボランティアの人たちが日々世話をする「地域猫」が多くおり，そのうちの一匹の写真を選んだ。朝の光のなかで，Ｆさんの前で静かに佇む白猫が写されている（図４）。Ｆさんは猫好きのため，ウォーキングの際に公園の猫たちをよく撫でているという。すると，ボランティアの人が話しかけてくれるようになった。「（今まで）話さなかった人と，公園に行くことで話すことが増えた」と話す。コロナ禍をきっかけにウォーキングを始めたことで，猫を通して地域の人たちと話す機会が増えたというエピソードだった。

一方で大阪に住むＪさんは，コロナ禍になって会えない人が増えたことや，大学にもあまり行かなくなったことで新しい人と出会う機会もなくなってしまったことに問題意識を感じ，以前から誘われていた「ボラスタ」と呼ばれる大学生によるボランティアスタッフ活動を始めたと話した。持参した写真は，９月に大阪府内の自然豊かな活動場所でボラスタ仲間と地域の人たちと一緒に撮った集合写真である。この場所へは毎月のように訪れているそうで，「新しい通う空間ができた」という表現が印象的だった。

Ｆさんはウォーキングという毎朝の習慣から，Ｊさんはボランティア活動

図４　Ｆさんの写真

というより意識的な地域コミュニティへの参画から，コロナ禍において地域との関わりが広がった例を見ることができた。２人のエピソードは異なるが，コロナ禍によって地域との関わりを意識的・無意識的にふり返るだけでなく，何らかの行動を起こし，それによって地域との関わりに変化があったという点には，着目しておく必要があるだろう。この点は，セッション２にもつながる重要なポイントである。

このようにセッション１は，参加者が持参した「地域との関わりをあらわす」多様な写真とその語りによって，大いに盛り上がった。時間的な制限のために一人一人の発言は数分に限られてしまったが，もう少し時間を伸ばすことで，このプログラムのみでも１つのワークショップが成り立つと感じた。

また，持参された写真と語りからは，ここで挙げた２つの側面だけでなく，20歳代である大学生がどのように「地域」をとらえているかに対する，より深い分析ができると考えている。例えば，写真が撮影された時期，撮影地・居住地・故郷の関係性，撮影対象が非日常（祭や卒業式など）なのか日常か，とらえられている地域の範囲，特定の国や県に対する典型的なイメージとの関連など，他にもいくつかの視点から考察することが可能だろう。これらの更なる分析は，今後の課題としたい。

３．セッション２　地域と私たちの関係を考えるグループ･ディスカッション：My “Local” before & with COVID-19

写真を媒介にそれぞれの地域の認識や，それにまつわるストーリーを共有した上で，今度は地域との関わりを協働的に考えるためのセッション２「ディスカッショ：My “Local” before & with COVID-19（コロナ禍前とコロナ禍（今）における「地域」との関わり）」を実施した。表２に記した３つのグループにわかれ，ファシリテーターとして筆者らプロジェクトのメンバーが１名ずつ加わった。話し合うテーマは次の２つとした。

① あなたと地域との関わりのなかで，コロナ禍前とコロナ禍（今）で変化したことはありますか。

② 地域との関わりに関心がない，必要ないと思っている友人がいるとします。どうしたら関心を持つきっかけが生まれると思いますか。

以下，（　）はグループ名を G1，G2，G3で示している。

3－1　日常的な行動の変容と地域の関わり

コロナ禍前と今の変化として多くあげられたのが，行動の変化とそれに伴う地域との関わりの変容である。セッション 1 でも多く語られた点であるが，セッション 2 では，日常におけるメディアとの関わりについても言及があった。例えばある学生は，日常生活における移動の様子を話してくれた。人混みをさけるためにシェア自転車を使うようになったという。それまではバスで，移動中は携帯にふれていたが，自転車をかりるようになり，乗っているときは携帯をあつかえないので「街中に目をむけるようになった」と話した（G2）。一方グループ 3 の学生は変化として「SNS の使い方」をあげた。「自分の時間で何をすればいいのかわからなかった」。そんな中，Instagram（インスタグラム）で情報を教え合うとか，情報について写真でまとめてわかりやすく教えあうといったことをするようになったという。別の学生は，ワクチン接種の予約が自治体の SNS 公式アカウントを介して行われ，その後もアカウントをそのままにしていているので，それをとおして自治体の情報が送られてくるようになり，地域の情報が「自然と目に入ってくる」ようになったそうだ（G3）。また，グループ 1 では電話も話題にあがった。ある学生は，以前は忙しいし楽しくて，離れて暮らす両親とあまり電話をすることがなかったそうだが，「やることがなくなってしまい」，離れて暮らす両親と週 1 回のペースで電話するようになった。両親との「温度」が，「すごくまた仲良くなったのを感じます」と話した。

これらは何気ない日常におけるごく小さなメディアとの関わりに感じられ

るかもしれない。しかし，CIT の観点にたてば，その変容が，私たち（住民）のナラティブや身近なストーリーを語るつながりに少なからず関係があることがうかがえる。

地域に関する発見があったという話もあがった。グループ２のある学生は，地元に住んでいた時は，家を一歩でも出たら必ず誰かとしゃべる関係につかれる時もあったという。しかし，一度一人暮らしをして地元に戻った時，「こんなにもみんな挨拶してくれて，すごく心配だったって，本当に家族のように思ってくれてる」と感じ，コロナ禍もあり「これがふるさとというか，（中略）なんだか泣けてきた」と話した。地域の人たちとの関わりは，どのようなきっかけで生まれるのかという議論もあった。お祭りなど地域のイベントのほかに，「犬」がきっかけになることや，農業をしていると「野菜の事の相談」や「野菜をあげあう関係」がうまれるなど，何かを媒介とした日常における近隣の人々との関わりについても語られた。

ワークショップ実施時の2021年11月はコロナ禍２年目となり，徐々に日常生活が動き始めていた。グループ１で話されたのは，コロナ禍の期間内における変化だった。ある学生は，当初は近所の子どもたちが，今まで会っていた人に会えなかったりすることで悲しい思いをすることがあったというエピソードを話した。それが少しずつ戻りつつあるのがひとつの変化だと語った。他の学生は，コロナ前の写真を見返し「こんな賑やかだったんだっておもいかえすこともあって」と話した。“before” と “with” という時間軸ではなく，コロナ禍においても時間の流れを少しずつ感じ始めた様子がうかがえ，その日常の小さな動きの中で感じている思いやエピソードが共有された。

その後，グループ１の議論は移動と地域のアイデンティティとの関わりへとすすんだ。例えば，ある学生は，自分の故郷に住んでいた時は，「このようなアイデンティティ」をもっているという感じはなかったが，離れたとき，自分は「〇〇人」としてのアイデンティティをもっていることを感じるようになったという経験を話した。一方，別の学生は，新しい地域にきたとき，「地域のコミュニティみたいなもの」ができあがっていて馴染めなかったと

いう。コロナ禍で下宿先に一人でいる人，故郷に戻ってきている人，大学の所在地にいけない人，いろいろな中で，私たちはなぜ会えなくなったり，離れたりすることでアイデンティティを意識するのだろうか，議論された。その上で，②の問については，一人の学生から「深く関わるということがアイデンティティが出てくる要因」なのではないかという声があがった。あるいは「共通すること」が地域にあるともしかしたらいいのかもしれないという意見もあがった。続けて，「いきなり地域というとなんかすごい大勢のところに飛び込むみたいな怖さがあると思う」「一人ずつ，段階を踏んでいくのが必要なのかな」という考えや，「地域で住む人々の共通性を探したら，こういうような地域的アイデンティティの形成に助かるかもしれません」という声があがった。

３－２　「地域」への関心を高めるために

「セッション２」の終了後は２つの問いについて，グループごとに発表した。最終的に②について各グループがあげたのは次のような提案だった。以下，学生の発表内容を筆者が箇条書きでまとめた。

【グループ１】

・地域という大きな枠組みからではなく，共有の話題，同じ趣味といった枠組みからどんどん広げていき，地域の繋がりとしていく。

・「違和感」の大切さ。「こういうところがちょっと違うよね」という「違和感」から入り，「でもここは共通できる部分があるよね」というところをみつけることで，そこから関心を持っていけるのではないか。

【グループ２】

・20歳代の人たちは意外にも地域に関心があるのだと感じた。地域との関わりが欲しいのかもしれない。ただ，なかなか情報が入ってこない。あるいはコミュニティに参加しようと思った時でも公民館など少しかたい部分（イ

メージ）がある。カフェでお話しができるなど，そういうイベントがあれば本当はやりたいのではないだろうか。

【グループ３】
・それぞれの地域の関わりについては，選挙にしても環境問題にしても自分達の中でそれぞれ思っていることはある。そうした問いかけを身近な人でもよいので互いに発信することで，次第に関心が深まっていくのではないだろうか。

また，各グループで共通していたのが，地域によって挨拶をすることが当たり前に感じるところもあればそうでないところもあるように，日常の関係性に違いがあることを感じたということだった。

４．考察

４－１　参加者のリフレクション

ワークショップをとおして学生はどのようなことを感じたのだろうか。「まとめ」の時間にチャットで交換した感想と，終了後に Google フォームをつかって回答してもらった事後アンケートをとおしてふりかえりたい。

まず地域に関する気づきとして，次のような感想があった。

「自分の地域にはないけど，近所の人たちと挨拶しあう文化が全然日本にあるんだな・・・と思いました」
「自分とは違った環境で育った方々の意見を聞き，こうも多様なのかという発見がありとても興味深かったです」
「私以外の方は，地域との距離が近い方（挨拶もするし，会話もするし…）という方で自分とは全然違う雰囲気で住んでいて新鮮でした。コロナで当たり前に気づいたという話が多く，コロナがもたらしたのは悪いことばかりで

はなかったのかなと思いました」

異なる地域を経験した「他者」とその経験を共有することで，ワークショップは「私」にとっての地域を再発見するような場となったようであった。

ではオンラインでのワークショップという機会について，どのように感じたのだろうか。

「地域に関することなので，やっぱり対面で顔が見える関係で行ったり，近い人々と行った方が地域の今後のためにもなると思いましたが，あえてオンラインで国をこえて話すことで今までには無かった視点や知識を得ることができました」

「留学生として，コロナで今も待機していますので，孤独感は強いですが，みんなの写真を見て，皆さんはコロナでいろんな残念があっても，生活を楽しんでいる様子が見えます」

「離れた土地の人たちと，ディスカッションして，自分はこう思っていると伝えたことで，その返答として違う目線からの意見が聞けたり，留学生たちからみたコロナ禍や考えなどを知れたため，有意義な時間でした」

今回は日本だけでなく海外から参加した人もいた。多くの離れた場所からもこうして集うことが可能になったのは，オンラインの強みだろう。コロナ禍におけるメディアの利用の仕方についても感想があった。

「強く印象に残っているのは，コロナ禍でそれぞれがソーシャルメディアをどのように利用したのか，その違いや，それらがどのように地域の認識やつながりを高めたかという点です。ソーシャルメディアでコミュニティの情報をアップデートしたり，最新のニュースを入手したりしている人もいれば，友達とのつながりを保つためにソーシャルメディアを利用している人もいま

した」[7]

最終的に，そもそも地域とは何なのかという根源的な問いがうまれた人もいたようだ。

「ディスカッションを通して，当たり前に感じていると気づかない自分と地域の関係性がどんどん思いつき始めました。関係性が色々あるところから，そもそも地域とは何か？地域への関心ってなんだろう？と疑問点も浮かんできました」
「地域との関わりに関心がない人へのきっかけづくりを考えるディスカッションは自分的に非常に難しかったです。何からが地域との関わりになるのか，地域との関わりに関心がないという認識自体がどういうことか途中からわからなくなってしまいました」
「地域という枠組みに捉われていると気づきました。この枠組みを外せる，意識しないようにさせる，そういった，きっかけを考えようと思います」

こうしたコメントからは，主催した筆者らが暗黙のうちに前提としている地域と，参加してくれた学生が抱いているイメージの間にギャップがあるのではないだろうか。そのような問いも生まれた。

4－2　主催者のリフレクション

筆者ら主催者が暗黙のうちに前提としていた「地域」とは，現在住んでいる場所，もしくはかつて住んでいた場所としての地域だった。研究プロジェクトの6名は，本ワークショップを実施する約2ヶ月前の9月13日，セッション1のプレワークショップを行っている。もし参加者だったらどのような写真を持参するだろうか。それぞれが考えを巡らせて写真を持ち寄り，Zoom上で共有した。この時点では，ワークショップ全体の流れやセッション2の内容はまだ決定しておらず，それを考えるためのプレワークショップ

でもあった。6名が用意した写真概要の一覧を，表3に示す。

6枚の写真と映し出された地域との関係性についての説明を一通り終えた後，筆者らには様々な気づきがあった。ここでは2点を指摘しておきたい。

ひとつは，写真に表された地域と自分自身との距離感がそれぞれ異なり，そのスペクトラムが見えてくると面白いのではないかという議論だ。例えば，東京の2名は自分のマンションと数軒隣りのご近所さんという，物理的にも自分から非常に近いところの空間や人のことを語り，それは大阪と愛知の2名による動物病院とお寺ではやや遠くに広がっている。福岡の市政だよりは，それよりも更に広い範囲をカバーするものだ。

それに対して広島の1名は，赤いローソンの写真は広島駅に初めて降り立った際に見た，身なりもグッズも真っ赤な広島カープファンの強烈な印象に結びついていると話し，地域との具体的な関わりというよりも，自分のなかにある抽象的でシンボリックな地域のイメージとしてローソンの写真を選

表3　主催者によるセッション1（プレワークショップ）

写真の内容	撮影地	説明
紙の市政だより	福岡	以前はざっとしか読まずに最終的に捨ててしまっていた「市政だより」。しかしコロナ禍になってから隅々まで読むようになり，しかも保管しておくようになった。
赤いローソン	広島	マツダスタジアムに向かう通称カープロードには，通常の青ではなく赤いローソン（コンビニ）がある。広島といえば真っ赤な出立ちのカープファンの印象。
愛猫と病院の診察券	大阪	今年の4月に大阪に引っ越したばかり。最初の地域との大事な関わりは，近所にある動物病院。猫が体調が悪くなった時，すぐに関わる必要がある場所なので。
覚王山にある日泰寺	愛知	名古屋に来て8年目になるが，住んでいる場所をうまく説明できない時がある。その際にこの有名なお寺の近くだと，説明のために活用させてもらっている場所。
マンションの機械式駐車場	東京	住んでいるマンションで他の住人を知る機会はほぼない。唯一，1台ずつしか出せない機械式駐車場で車が出るのを待つ間，一緒に並ぶ人と話をして顔を覚える。
アマチュア落語家のママ友	東京	今年の3月に引っ越しをした。子供の小学校のことや近所の情報など，聞けばすぐに詳しく教えてくれる落語好きの近所の先輩ママ。大変お世話になっている。

んだと自己分析していた。こうした各自の地域と自分との距離感の違いや重なりが，グラデーションやスペクトラムとして見え，なおかつコロナ禍前後でどう変化したかが見えると面白いのではないか，という点について話し合っていた。

もうひとつは，当然のことながら各自のライフスタイルによって地域との関係性は変わるということだ。日常的に車を利用しているか，子供がいるか，動物を飼っているか。それによって生活圏は変わり，見える地域の風景も変わるだろう。筆者ら6名のほとんどは，現在生まれ育った場所ではない国や地域に住んでいるという点にも話題が及んだ。参加者の学生はどうだろうか。実家に暮らしている人も多いかもしれないし，地元から離れて一人暮らしをしている場合もあるだろう。その際，地域として取り上げるのは，生まれ育った地元でも，今住んでいる場所でもどちらでもかまわないという点については確認をしていた。

前置きが長くなってしまったが，すなわち，筆者らが主催者として暗黙のうちに前提としていたのは，住むという行為や経験を通して得られる空間的な広がりを中心とした地域，もしくはシンボリックで抽象的なイメージとしての地域だった。ここまで多くの学生が，親や家族といった非常に親密な関係性の延長上に地域を結びつけることや，自分自身のルーツに深く関わる語りのなかに地域を紐づけることを，十分には想定していなかったのである。

それは，主催者である筆者らが半無意識的に前提としていた地域をふり返る契機となり，学びとなった。学生たちの持ち寄った地域は，プレワークショップで筆者らが語った空間を軸としたものに対して，より時間的な広がりを感じさせるものでもあった。20歳代の学生たちにとって概念や枠組みとしての地域は曖昧で意識化され難い一方で，非常に身近なところから，それぞれの内面にも深く関わる人生経験の延長上にも捉えられる可能性を，コロナ禍における本ワークショップを通して見出すことができた。地域コミュニティに家族や親しい友人を超えた他者との関わりを求めるならば，この点を内包する実践のデザインを試みなければならないだろう。

4－3　今後に向けて

先述の通り，今回は地域という概念について明確な定義づけをせず，「私にとっての「地域」」とすることで参加者に解釈を委ねた。セッション1の報告でもふれたように，参加者の解釈も，参加者にとっての地域もさまざまであり，その多様さこそが地域を考える意義と難しさを物語っているといえるだろう。その点は先立って実施した6都府県におけるアンケート調査の結果も踏まえながら今後検討していく必要がある。

その上で，今回，参加者の間でときおり聞かれたのが，地域に対して敷居の高さを表す「かたい」といったイメージだった。それが「地域」に関わるひとつのハードルになっているようにも感じた。一方でそれは，地域との関わりの濃淡にかかわらず，明確な地域へのイメージや枠組みがすでにあるともいえるだろう。「地域という枠組みに捉われている」という感想などからも推察される。今回のワークショップの対象とした大学生世代の人たちが，地域に対してどのようなイメージや枠組みをもっており，それらが構築される背景にはどんなことがあるのか。そこには世代間や地域ごとの差があるのか。それらを考えることも，今後の地域と私たちの関わりを考える上での重要な視点となるだろう。

また，グループ3の「それぞれの地域の関わりに関しては，選挙にしても環境問題にしても自分達の中でそれぞれ思っていることはある」という発表も印象的であった。大学生の世代の人たちがすでに抱いている地域との関わりを見逃さないようにすることも，地域コミュニティに基づく実践をこれから進めていく上で，大切になってくると感じた。

ところで，本ワークショップで，もうひとつ指摘しておきたいことがある。それは，セッション1，セッション2のいずれにおいても，CIT における “Geo-Ethnic Media”「地域のメディア」，とりわけ伝統的メディアにあたる言及がまったくなかったということだ。道端での挨拶や，育てた野菜を交換しあうエピソードなど近隣住民とのコミュニケーションや，公民館やボランティア，サークルなど「コミュニティ組織」，SNS を介した情報のやり

とりに関する言及はたびたびあがった。それに対して，ローカル紙や地方放送局，地域の雑誌など，地域に根ざしたメディアに関する話題はどのグループもまったくといっていいほど出なかった。地域を考えるとき，SNS は意識されても，紙媒体やテレビといった伝統的なメディアや，地域に根ざした媒体というものが議論の俎上にまったくあがらなかったのだ。先述の通り，CIT はコミュニティにおけるストーリーテリング・ネットワークにおいて「住民」「コミュニティ組織」「地域のメディア」の存在と相互の関わりが，住民の市民的関与や地域への帰属意識と深く関わっているとする（Kim & Ball-Rokeach, 2006: 176-178）。CIT はアメリカのコミュニティにおける調査をもとに発展された理論であるが，その視座で日本のコミュニティやそのコミュニケーションを考えたとき，私たちは三者のどのような関係性を導き出すことができるのだろうか。今後の大きな課題であると感じた。

注

1）科学研究費助成事業の助成をうけた共同プロジェクトである。成員は鳥海希世子を主担当とし，ジョン・ジュヨン（国際基督教大学），土屋祐子（桃山学院大学），宮田雅子（愛知淑徳大学），河炅珍（広島市立大学），林田真心子の 6 名。（）内はワークショップ当時の所属である。詳細は https://comep.site

2）「地域の暮らしとコロナ禍におけるメディア利用に関するアンケート調査」。サーベイ会社を通じたオンライン形式の調査。20歳～79歳の男女を対象に 6 都府県ごとに約500サンプル計3,002の回答を得た。年齢は各地域の比率に応じた。

3）本稿は「1」「4」を林田と鳥海で共同執筆し，「2」を鳥海，「3」を林田が主に担当したものである。

4）ワークショップは昭和女子大学倫理審査委員会（承認番号21-42），福岡女学院大学研究倫理審査委員会（受付番号21020）の承認を受け実施した。ワークショップの模様は参加者の同意を得た上で録画し，発話の分析にはそれを用いた。なお本稿では詳しく触れないが，ワークショップ全体をとおしてグラフィック・ファシリテーション（担当：しごと総合研究所・伊澤佑美氏）をとりいれ，セッション 1 とセッション 2 をつなぐ役割を果たした。

5）チラシのデザインは宮田雅子が担当した。

6）2枚持参した3名の写真は異なるものではなく，2枚が関連するものだった。なお「図4」については持参した写真の一部分を本稿に掲載している。
7）英語での回答を筆者が拙訳したものである。

謝辞

本実践に協力してくださった学生のみなさんに心から感謝を申し上げます。
本研究は，JSPS科研費（JP20K12544）の助成を受けています。

参考文献

鳥海希世子（2022）「英国「Amber」における「学びと参加プロジェクト」の転機 ―地域コミュニティ連携によるメディア実践とそのデザイン―」『学苑（昭和女子大学紀要）968号』pp.30-44

鳥海希世子，ジョン・ジューヨン（2022）「メディア研究から考えるデザイン実践の方法論に関する試み　―実証的調査研究と創造的実践研究の連携から」『日本デザイン学会研究発表大会概要集　2022年69巻 5A-02』日本デザイン学会，pp.146-147

水越伸・飯田豊・劉雪雁（2022）『新版　メディア論』放送大学教育振興会

Chen, N.-T. N., Dong, F., Ball-Rokeach, S. J., Parks, M., & Huang, J.（2012）. “Building a New Media Platform for Local Storytelling and Civic Engagement in Ethnically Diverse Neighborhoods”. *New Media & Society*, 14（6）, 931-950.

Kim, Y. C., & Ball-Rokeach, S. J.（2006）. “Civic Engagement from a Communication Infrastructure Perspective”, *Communication Theory*, 16（2）, 173-197